

きゅうり

1 予報（6月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
黒星病	—	やや少	(1) 6月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、感染には不適な条件である。(—)
斑点細菌病	—	並	(1) 6月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
べと病	—	並	(1) 6月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
うどんこ病	—	並	(1) 6月の気温は平年並か高い予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
モザイク病	—	やや多	(1) アブラムシ類の発生がやや多い見込みであり、本病の感染リスクも高い見込み。(＋)
ワタアブラムシ	やや早	やや多	(1) 5月の平均気温は平年よりやや高く推移しており、発生は早まる見込み。 (2) 6月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件である。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(—)：少発要因、(—)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

(1) 黒星病、斑点細菌病を対象とした防除を基本とし、入梅以降はべと病を中心とした予防散布を行う。

【黒星病】

- (1) 低温・多雨条件で発生が多く、生育初期に発生すると被害が大きいため、6～7月の防除を重点的に行う。
- (2) 発生後の散布では防除効果が現れにくいので予防散布に努める。
- (3) 生長点や若い葉、幼果に発生しやすいので、生長点等先端部にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

【斑点細菌病】

- (1) 生育初期に降雨が多いと発生しやすい。定植時にオリゼメート粒剤を施用し、6月下旬から茎葉散布剤で防除する。
- (2) 発生前は、ヨネポン水和剤等を予防散布する。発生後は銅水和剤(混合剤を含む)の効果が優れるが、連用すると薬害(葉の硬化等)が発生しやすいので注意する。

【べと病】

- (1) 発病を確認してからでは被害が大きくなるので予防散布を基本とする。一般に、県中南部は6月下旬、県北部は7月上旬頃から防除を開始する。下葉など、古い葉から発生しやすい。

【うどんこ病】

- (1) 初発を確認してからの薬剤散布でも防除が可能であるが、発病株率が50%を超えると急激に蔓延するので、早期防除を行う。なお、葉裏や茎・葉柄で蔓延するので注意して観察する。

### 【モザイク病】

- (1) アブラムシ類による媒介や、整枝・収穫等の管理作業の刃物により汁液伝染する。
- (2) 生育初期に激しいモザイク症状が発生した場合には抜き取り処分する。
- (3) 生育期前半のアブラムシ類防除を徹底する。

### 【ワタアブラムシ】

- (1) 圃場周辺の雑草は発生源となるので除草する。
- (2) 反射資材（反射マルチ、防虫テープ等）を使用して有翅虫の飛来を忌避する（詳細は平成 14 年度病害虫防除技術情報No.14-3 参照）。
- (3) 定植時の粒剤施用とその後の茎葉散布による初期防除を徹底する。
- (4) ネオニコチノイド剤（粒剤を含む）を使用した場合、次回の散布時には別系統の剤を選択する。
- (5) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同系統の薬剤を連用せず、異なる系統の薬剤をローテーションで使用する。